
My sweet goddess

ちょぴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

My sweet goddess

【Nコード】

N8057P

【作者名】

ちよぴ

【あらすじ】

崖の上のポニョ、ポニョの父であるフジモトの、若かりし日のお話。

潜水艦ノーチラス号の乗組員、フジモト少年とその友人のある1日。

1・親友の話

「なんだって？」

緩んだボルトを締める手を止め、セナは聞き返した。

暗くて狭い潜水艦の中。お粗末な空気循環システムのお陰で年中蒸し暑く、息苦しい。おまけに深海に行くこの船は、昼だろうと夜だろうと、いつも薄暗かった。

燃料費節約のため、必要最低限の明かりしか備えていないのも原因のひとつだ。おかげで船の整備をするにも小型のライトが手放せない。

乗組員全員の命がかかっているというのに……整備する側としてはため息のひとつもつきたいところだ。

今日もセナはいつものように、船の最下部にある整備室にこもって機械にへばりついた錆と闘っていた。そこへふらりとやってきたのは、乗組員の一人である少年だった。クルーの中でも唯一の同年代とあって、少年とセナは仲が良い。こうしてどちらかが作業中にやって来て他愛もない話することも多いのだが……

セナは機械から目を離して、少年の顔をまじまじと眺めた。こいつ頭は大丈夫だろうか、という疑いを込めた眼差しで。

「悪い、フジモト、もう一回言ってくれないか？」

聞き間違いであって欲しい、というセナの思いとは裏腹に、少年は頬を紅潮させて言った。

「だから、女神様を見たんだ」

なんてことだ——セナは心の中で嘆いた。いつかこんなことになるのではないかと前々から思っていた。狭っ苦しい船の中に籠りきり、お天道様の光もろくに浴びずに生きているのだ。心が病気になるってしまうものもあるだろう。

まさか、それが唯一の友人の身に起こるなんて。こんなことになるとわかっていたならば、陸へ寄ってくれと船長に頼んでおけば良かった。いくら思っても、後悔は先に立たないものだ。

セナは友人の顔を見つめた。

彼、フジモトは妙に澄みきった瞳でセナを見返してくる。茶色というか、光の加減では真っ黒に見える瞳で——詳しくは知らないが、彼は東洋のどこかにある島国出身だという。

彼の伸びっぱなしの髪はひどいくせ毛で、重力という言葉を知らないかのようにあちこちにはね飛んでいる。おまけに海水で傷み、本来ならば美しいはずの黒髪は、色が抜けて赤茶色になっていた。セナはいつもこれを海草のようだとからかうのだが、フジモト本人はさして気に止めていないようだ。

彼の顔立ちはセナに比べてだいぶ幼く見える。それも東洋人ならではだろう。

黄味がかった肌に、睡眠不足が原因でできた隈が目立つ。顔の真ん中では大きめの鉤鼻が幅をきかせていて、その鼻のお陰で顔立ちの少年らしい可愛らしさは半減している。決して不細工ではない。愛嬌のある顔だと、セナは思う。

沈黙が続いた。

ごうごうと低く唸る機械音だけが二人の少年の間に響く。セナが言葉をなくしている一方で、フジモト少年は繰り返した。

「女神様を……」

「オーケー、わかった。大丈夫、聞こえているよ」

セナは手を振り彼の言葉を遮った。フジモトはきょとんとして目をしばたいている。

やめてくれ——セナは叫びそうになった。そんな無垢な瞳を向けないでくれ！

部屋の壁に掛けているカレンダーを見て、セナはため息をついた。次に陸に上がるまではまだしばらくある。一刻も早く医者に見せたいところだが……どうやら船長に直談判するしかなさそうだ。

「おいセナ、お前信じてないな？」

セナの態度から何かを感じ取り、フジモトは唇を尖らせた。

セナはぎくりと肩を揺らしたが、動揺を悟られぬよう真面目な顔を作った。ここで彼の機嫌を損ねてはいけない。もちろん適当にあしらっても駄目だ。真剣に向き合ってやらなければ。

「そんなことはないさ。女神を見たって、一体どこでだい？」

そう興味がある振りをして、セナは身を乗り出した。話をきけば、解決の糸口が見えるかもしれない。自分は医者ではないし、あまり期待はできないが。

セナが話に乗ってきたことによって、フジモトは上機嫌になったようだった。

「昨夜は私が見張り当番だったんだ」

少女のように頬を染めて、興奮ぎみに語りだした。

なんだか長くなりそうだ——セナは若干げんがりして、手にしていたレンチを作業台に置いた。

* * * *

彼の話によるとこうだ。

昨夜フジモトは、いつものように狭いリーダー室で夜を過ごしていた。

潜水艦は錨を降ろして停泊する、ということができない。だからたとえ夜中であろうと進み続けなければいけなかった。

はじめてそれを聞いたとき、まるでマグロだな、とセナは思った

ものだ。

船にはもちろん操縦士がいるが、彼らだけでは真夜中の暗い海の危機を察知するのは難しい。そこでセナやフジモトのような少年の乗組員は皆、交代で夜通しの見張りをするのだ。

昨夜は、海がとても静かであったそうだ。

この季節にしては珍しく、いつもより水が澄んでいた。これならばうっかりジンベイザメに体当たりしたり、付近の漁師たちが仕掛けた地引き網に引っ掛かる恐れはなさそうであった。

今日は見張りが楽だと、鼻唄混じりにコーヒーをすすっていたフジモトであったが、ふと船の小窓から外に目を向けると、見たこともないような小魚の群れがこちらにやってくるではないか。

彼は目を疑った。

こんな深い海に、金魚のような小さな魚が泳いでいるのを見るのなんて初めてだ。おまけにその魚たちは、ホタルイカでもないのにぴかぴかと光っていた。

いや、ホタルイカなんかとはわけが違う。まるで黄金のようにまばゆく輝いていたのである。夢か幻か、ついに自分は目を開けたまま眠れるようになってしまったのかと頬をつねってみると、確かに痛みを感じ、フジモトは驚き一人飛びあがった。

吸い寄せられるように小窓に張り付いて、その様子を眺めた。

数えきれない程の魚達が過ぎていった後も、フジモトはしばらくぼうつとして窓から海を覗き込んでいた。

さっきのは、一体何だったんだろう？ 突然変異のイワシかなにかだろうか——と頭を悩ませていると、もっと大きな何かがやって来ていることに気が付いた。

最初は群れからはぐれたクジラかと思った。それくらい大きかつ

ただ。

すぐに違うとわかったのは、それがクジラよりも速いスピードでぐんぐんとこちらに近づいてきたからだ。

少年はあんぐりと口を開いたまま、閉じることを忘れてしまった。

監視室の小さな窓から見えたのは、人だった。

大きな大きな、光輝く女性が、フジモトの目の前を一瞬で過ぎていったのであった。

* * * *

話終えたフジモトは、すっかり感傷に浸っている。

セナはそれを目にして、嫌な予感がした。いや、もう予感ではない。明らかに……

「まさか、お前その女神様とやらの惚れちまったってわけか？」

セナの言葉に、フジモトはきやつと小さく叫んで頬に手を当てた。あまりの気色悪さに、セナの背筋はぞっとした。まるで、恋する乙女ではないか。

「勘弁してくれよ」

彼に聞こえないようそつと呟く。

別に、フジモトが誰かを好きになるのはいいのだ。普段色恋とは縁遠い生活をしているせいで、二人とも年頃のくせして浮かれた話もない。

彼が誰かに恋をしたというなら喜ばしいことであるし、セナとしては協力のひとつやふたつしてあげたい。

だが……その相手が人間ではないというのなら話は別だ。彼の幻覚ならば手の施しようがないというものだ。

「ようし、次に陸に上がった時には船長に女の子のいる酒場に連れていってもらおうな」

「どうしてそうなるんだ」

フジモトは思いきり眉を寄せた。

「いいか、フジモト。お前はちよつと疲れているんだよ。昨日だって昼間はずっとコウイカの観察をしていたじゃないか。きつと居眠りをして夢をみたんだ。光輝く女神様なんて、ネモ船長だって見たことないさ。そうさ、船長に話したかい？」

畳み掛けるようなセナの言葉に、フジモトはゆるゆると首を横に振った。

「いや、言つてない」

「それはなんでだ？不審なものを見たら船長に報告するきまりだろう？」

セナが問い詰めると、少年の眉は段々と下がり始めた。

「……信じてもらえないと思つたから」

「だろう？お前にだつてその女神様が幻だつてわかっているんじゃないのか？」

「だ、だけど！」

そこで少年は顔を赤くして声をあげた。

「確かに見たんだ！セナ、君なら信じてくれると思つていたのに」
そう泣きそうな顔で言うものだから、セナは思わずたじろいでしまった。

「ああ、ごめんよ。あまりに現実味がないものだから。頭ごなしに否定して悪かつたよ」

打つて変わつて優しい声で、セナはフジモトの肩を叩いた。確かに、いきなり否定されるのでは、治るものも治らないかも知れない。セナはちよつと後悔した。

泣き叫ぶ赤ん坊に頭ごなしに怒鳴つても、泣き止むはずはないのだ。

まずはご機嫌伺いから——大丈夫、こつちの相手は言葉も通じるし、子守唄なんか歌わなくても勝手に寝てくれるんだ。

楽勝じゃないか……セナはそう自分にいいきかせた。

1・親友の話（後書き）

フジモト愛により生まれた妄想話。
楽しんでいただけたら幸いです。

2・深夜の見張り

その夜——どういいうわけかセナは眠らずにいた。

目の前には、上機嫌のフジモトの姿。成り行きで、今晚の見張り役を二人で行うことになったのである。もちろん、フジモトの提案だ。

「セナ、砂糖はいくつ入れる？」

赤毛の少年はみるからにうきうきとして、いれたてのコーヒーをカップに注いでいる。

「いや、いいよブラックで」

セナは手を伸ばしてそれを受けとる。使い込まれたカップの縁は小さく欠けていた。

狭いレーダー室に、コーヒーの香りが充満している。

何が楽しくて、こんな夜中に密室で男と二人きりにならなきゃならないんだ。セナはすでにぐったりしていた。

「ミルクも入れないのか？胃を悪くするぞ」

自分のカップに角砂糖を三つも四つも落しながら、フジモトはセナを見上げた。

そっちこそ、虫歯になるぞ——喉元まで出かった言葉は、コーヒーと共にセナの胃袋に落ちていった。

ジージーと低い音が二人の間に響く。

狭い部屋の壁一面には様々な機械が置かれ、そのどれもが古びていて、どこかしらが錆び始めていた。

ちらとモニターに目をやるが、それは相変わらず沈黙を守っている。

この船に近づいてくるものがあればすぐに影が映るはずだ。だが今は鮫の一匹、いや、小魚一匹の影も映してはいない。

セナは緑色の升目とひとしきりにらめっこをした後、ぽつりと呟いた。

「今日は来ないんじゃないか」

「いいや、きつと来る」

監視にすっかり飽きて、角砂糖を積み始めていたフジモトが驚くべき早さで答えた。

「どうしてわかるんだ？」

退屈から来るあくびを噛み殺し、セナはフジモトを振り返った。

「なんとなく」

「そんなことだろうと思ったよ」

どこからその自信が湧いてくるんだか。セナはがっくりと肩を落とした。

すっかり空になったカップを狭いテーブルの隅に追いやって、セナは両肘をテーブルに預けてそこに突っ伏した。

安いコーヒーでも、カフェインの効果は抜群でちっとも眠くはない。

少しだけ顔をあげて向かいの少年を覗けば、彼は頬杖をついた格好のまま小さな窓の外をじっと見つめていた。

「なあ」

セナは少年に声を掛けた。

フジモトは振り返りもせず「ん？」と間抜けな返事を返す。

「もし…もしもの話だけだよ。お前の言う女神様とやらが、お前の事を気に入ったらどうするんだ？」

セナの質問に、フジモトはきよとした表情を浮かべる。

「気に入る？」

「いや、だから……」

フジモトの察しの悪さに、セナは言葉をつまらせた。照れ隠しにがしがしと頭を掻きむしる。

「もしも、お前と、け、結婚したいって言ったらどうするんだ？」

「結婚!？」

セナの発した言葉に、フジモトは飛び上がった。茹でたタコのように顔を赤らめ、髪を逆立てる。

「ま、まさか、そんな……」

少年は急にしどろもどろになって視線を泳がせた。

「もしもの話だよ。何もその女神様に限った事じゃない。地上に上がった時にそういう人が現れたらどうする？船を降りるのか？」

冷やかしくではなく、セナは真剣に聞いているのだ。

先輩の乗組員にも、そういった理由からこの船を去っていった者が数名いた。

皆それぞれ夢を抱いてノーチラス号に乗った筈なのに、途中で降りてしまうなんて、セナには理解できなかった。

「……わからない」

フジモトはゆるゆると首を降った。

「わからないよ。おれはこの船が好きだし、まだまだ海の事を知りたいと思ってる。本当に怪物クラーケンがいるかどうかこの目で確かめたい。それに」

フジモトはぱつと顔をあげ、セナの瞳を覗き込んできた。

「こうやってセナと一緒にいるのも楽しいからさ」

言って、幼い笑顔を浮かべる。あまりにもまっすぐな言葉に、言われたこっちが恥ずかしくなった。セナはそっぽを向いて「あっそ」とぶつきらばうに返した。

その時だった。

セナの視線の先、レーダー室の丸い窓に小さな光がちらついた。

セナはぎょつとして身を乗り出した。

まさか！

慌ててモニターに目を向けてもそこには何の影も映っていない。一体どういうことだ!?!——セナは鼻先がガラス窓にくつつくほど

近寄った。

窓の外には、フジモトの話通りの金魚のように小さな魚の群れがいた。

ただの魚でないことは一目瞭然だ。その数、数百……いや、千は超えているかもしれない。その一匹一匹どれもが、まるで黄金のように眩く輝いている。

「——来た！」

セナが言葉を失って茫然としている側で、フジモトは嬉々として声を上げた。

セナの体を押しのけ自らも窓に寄ると、その鉤鼻を窓に押し付けて食い入るように小魚の群れを見つめる。

「ほら、ご覧よセナ！ 嘘じゃないだろう！！彼女が、あの人が来るんだ！」

少年はすっかり興奮して、すぐ隣にセナがいるのを忘れてしまったかのように叫んだ。

彼の高い声に鼓膜をやられそうになりながらも、セナは信じられない面持ちで力^{ちから}ラスを隔てた外の様子に釘付けになっていた。

小魚の群れは、船に寄り添うように泳いでいる。

いや、それは違った。小魚の群れが船を取り囲んで進路を変えているのだ。

その証拠に、レーダー室にある水深計の数値はみるうちに小さくなっていく。それはこの船が深海からどんどん浮上していると言うことだ。

「おい、一体どうなっているんだ！？俺達、こいつらに何処かに連れていかれてるぞ！」

セナは大急ぎで、操縦室への無線のスイッチを入れた。

まさかこの事態を操縦士達が気づいていないとは思えないが、異常があつたらすぐに知らせるのが見張り役の決まりだ。

だが、こんな時に限って無線は繋がらない。元々調子が悪かったが、今壊れなくてもいいのに！セナは苛立った。

「くそっ、このポンコツめ！」

そう悪態をついて、無線機を蹴り上げた。そんな事をしても無線機が直るはずもない。そうこうしている間にも、船はどんどん運ばれていく。

ガクンとひととき大きく揺れ、二人は踏ん張りきれずにレーダー室の中を転がった。

セナはテーブルの足に後頭部を強打して、涙目になった。

頭を押さえながらふらふらと立ち上がると、同じように頭を打ったのであるうフジモト少年が、自分の額を押さえながら窓の外をじっと見つめていた。

「おい、大丈夫か——」

言い掛けて、少年ごしの外の景色に仰天した。

そこにはもう黄金の魚達の姿はなかった。濃い紺色だが、暗い深海ではない。似た色ではあるが、それとは全く異なるものだった。

小さな丸い窓から見えるのは、舞い上がった海底の砂でも、塵のようなプランクトンでもない。

一面の紺色に瞬く小さな銀の粒……

「星？」

誰に問うでもなく呟いて、セナは目をしばたいた。

まさかそんな筈はない。この船はついさっきまで深海を進んでいたんだ。水深計に目をやるが、先程のセナの蹴りのせいだ、それは目盛の途中で針が折れてしまっていた。

本当に海面に浮き上がってしまったのか？

セナは疑いを隠せなかった。そんなに急に水深を上げたら、体に圧が掛かって少なからず影響があるはずだ。

だが、頭をぶつけてたんこぶをこさえた以外は特に異変は感じら

れない。

「フジモト、これは一体……」

セナが再び声を掛けると、少年は弾かれたように動き出した。一目散に、リーダー室から船の天辺へ繋がる梯子をよじ登る。

「おい！何処に行くんだよ！」

セナは慌てて少年を引き留めようと服の裾を掴んだ。

「行こう、セナ！彼女が来てくれたんだ！」

フジモトは満面の笑みを浮かべて、服を掴んだセナの手をぐいぐいひっぱった。この細い体のどこにこんな力があるのだろう、セナは驚きを隠せなかった。

2・深夜の見張り（後書き）

まだ続きます。

少年フジモトは甘党だったらしいなあと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8057p/>

My sweet goddess

2010年12月30日12時55分発行